

天眼鏡

Z世代と有機農業

最近耳にするようになった言葉の一つに「Z世代」がある。1995年が「インターネット元年」とされるようであるが、一般的にはこの時期以降に生まれた人口層を「ジェネレーションZ」、「Z世代」と呼ぶらしい。先に見たNHKスペシャルは、アメリカでの気候変動対策等で“変革”を訴える高校生たちにかなり焦点を当てて取り上げており、インターネット元年以降に生まれた世代という以上に、いまだ投票権を持たない十代半ば以降の若年層を指していることが多いように感じる。

そのZ世代は生まれた時からインターネット環境が身近にあり、スマホやパソコン等を自在に操作して情報を収集・吸収する「デジタルネイティブ」とも呼ばれる。そのZ世代の大きな特徴が環境問題への強い関心である。まさにZ世代を象徴するのが、スウェーデン議会の前で「気候のための学校ストライキ」の看板を掲げて気候変動対策を呼びかけ続けたグレタ・トゥーンベリさんである。国連での記憶に残るスピーチをはじめとして、各地で活発な活動を展開しており、「グレタ効果」とも言われるように彼女の情報発信力、影響力には相当なものがあるが、これを含めてZ世代の発言はさまざまな場面で影響力を強めている。

こうした動向は欧米のものであり、日本ではまだそこまではいっていない、と受け止めていた。ところがつい先日、鹿児島県の友人H氏から「一万人の人出で賑わった第14回『オーガニックフェスタ』鹿児島」についてのメールが届いた。NPO法人鹿児島県有機農業協会が実行委員会事務局となって、11月の27、28日の両日にわたって、錦江湾に浮かぶ桜島を背景にするウォーターフロントパークでオーガニックフェスタを開催したそうで、出店した店舗は90、そしてここに足を運んだ人は両日で1万人を超したとある。地方の有機農業でこれだけの規模での企画・運営が行われ、しかも14回も開催を続けていることに驚かされた。これに関連して、メールには鹿児島県の有機農業の普及度は

北海道に次いで全国で2位とある。

そこでZ世代との関わりについてであるが、このフェスタでボランティアを定員300人で募集したところ申し込みが多く、フェスタの1週間前には締め切らざるを得なかったそうだ。そしてその申込者であるが、これまでは多くを大学生が占めていたものが、今年は高校生、それも鹿児島市内にある普通高校の生徒の申込が多かったという。

H氏はこれについて、地球温暖化をはじめとする環境問題や地球の未来への不安を前にして、高校生もSDGsやみどりの食料システム戦略に関心を強め、これらについての認知度を高めており、「若者は彼らなりに『自分たちの生きる時代』に思いが及ぶのは当然」としている。そして、「過去、これまで有機農業は『言うは易く実行は難しい』もの、従ってマイナーなもの、という認識が一般的でした。しかし、現にオーガニックフェスタにボランティア参加を望む高校生が増えたという事実を前に、一面では頼もしく思うと同時に、世の移り変わりを実感させられました。」とコメントしている。

別途、全国農業会議所等による新規就農者の就農実態に関する調査では、新規就農者の中で有機農業に取り組む割合は、全作物で有機農業を実施しているものが20.8%、一部作物で有機農業を実施しているものが5.9%（いずれも2016年）と報告されている。両者を合わせると、4分の1超の新規就農者が有機農業に取り組んでいるもので、Z世代の関心なり、田園回帰の流れ等を勘案すると、みどりの食料システム戦略の2050年有機比率25%の目標も荒唐無稽な数値ではないようにも思える。令和4年はその本格的な取組みスタートの年となる。

（農的社会デザイン研究所 代表 蔦谷栄一）